MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

MEIJI UNIVERSITY MUSEUM

Vol.62 2014

特集

新博物館開館10周年特別企画

アカデミーコモン新博物館の10年

Contents

●博物館活動報告 ── 前場幸治瓦コレクション 特別展「天平の華　東大寺と国分寺」を開催
公開特別講義　伝統的工芸品の経営とマーケティングVol.8
茨城県玉里舟塚古墳の再整理プロジェクト　出土埴輪の3次元デジタル計測
●展示＆リサーチ ── オーソドックスな古文書展示 学芸員養成課程の初演展示／「SFと未来像」展
●学芸研究室から ── 先史時代ハンターの遊動生活
●市民レクチャー ── 江戸時代の津波警報 ―災害史料としての内藤家文書―
●収蔵室から ── 徳川家重の一字一石経
●南山大学協定通信／図書室から／博物館入館者数の動き／団体見学の記録／M2カタログ／博物館友の会から

特別展の盛況（2005年度特別展「江戸時代の大名」）

新博物館10周年特別企画

特集 アカデミーコモン 新博物館の10年

2014年4月にアカデミーコモンの博物館は開設10周年を迎えます。
ほんの10年、いや、10年ひと昔？ その10年のあゆみを振り返ると、
そこからは21世紀における大学のあり方、博物館のあり方が見えてきます。

新博物館の開館と同時に
イメージチェンジした本誌（37号・2004年）

大学における生涯学習の潮流

1990年代の後半。明治大学の公開講座をオーガナイズするリバティアカデミーの設立など、大学における生涯教育事業の活性化が顕著でした。その少し以前、教育・研究に次ぐ大学第3の役割として社会連携が提唱され始めていました。駿河台B地区（旧大学院棟及び5·6·7号館跡地）の再開発計画において新校舎に生涯教育棟の機能を付与する方針となり、博物館が収容されることになりました。かつての大学は、「象牙の塔」とも揶揄されたように、一般社会からは隔絶した空間、敷居の高い場所としてイメージされていました。実際、明治大学の駿河台キャンパスも高い柵で囲まれていましたが、古い校舎が取り壊され新しく校地の整備が進むと、社会に開かれた大学として門も塀もないキャンパスが姿を現しました。

来館者25万人達成のセレモニー（2008年）

公開講座―第53回考古学ゼミナール（2013年）

「明治大学博物館」の設立

以前、大学には刑事博物館、商品博物館、考古学博物館という3つの博物館がありました。各々大学教育の実践の中から生まれた特色ある施設でしたが、少ない予算と人員による活動には制約がありました。また、大学内には3博物館以外にもたくさんの貴重な学術資料が収蔵されていましたが、それらを一般社会に公開する場がありませんでした。折しも、国立大学では、大学内の学術資源・情報を一元的に管理し、活用促進をしようというユニバーシティ・ミュージアム計画が文科省の肝いりで推進されつつありました。そのため、明治大学としても、博物館機能の強化と公開施設としての充実を目指し、3館を統合し、新たに明治大学博物館として再編することが目指されました。新しい施設の建設と同時に新しい体制の構築が図られたのです。新博物館には、3館の展示を継承する常設展示室に、同じく公開施設としての性格を有する大学史資料センターの展示室を併設し、また、学内における様々な研究成果や学術資源を紹介する場として特別展示室が構想されました。図書室やAV教室、資料整理室など教育普及・調査研究関係の施設も最新の知見の下に構想・整備されました。

博物館としての最新の設備を備えています（収蔵室）

新博物館の活動

新しい博物館においては、その施設・設備の飛躍的な充実に見合った新しい試みが実現しています。それは旧3館時代とは隔世の感のある、スケールを全く異にするものとなりました。開館と同時に開催された特別展「韓国スヤンゲ遺跡と日本の旧石器時代」は韓国忠北大学校との共同事業として実施され、今日のグローバル化の先駆けとなりました。一方、日本国内においても館蔵品の関連地域との連携という点で翌2005年の特別展「江戸時代の大名～日向国延岡藩内藤家文書の世界～」は、今日注目される大学と地域と

の連携の実践の成果でした。以降、例年の特別展は美術品専用輸送車を利用して遠方から展示品を借用する本格的な企画が続きます。2006年の特別展「掘り出された子どもの歴史」では国指定重要文化財の展示がおこなわれました。新施設の建設にあたっては重文展示の要件を満たす設備を整えましたが、展示室内の空気環境の調整や建物全体のセキュリティ計画などクリアする課題は多くありました。これを契機に、以降、度々の重文展示が実現することになります。

子ども向けの事業―親子はにわ教室（2009年）

学内共同利用機関として

新博物館の建設にあたって意識された最大の課題は、“3博物館”ではなく、文字通り明治大学の博物館として全学的な利用が促進されることでした。そこで、各学部をはじめ学内諸機関との連携が模索されました。従来から実績のあった文

調査研究―教員と院生・学生を交えた古文書の調査（内藤家近代文書）

学部・商学部との連携はもとより、展覧会も、図書館、大学史資料センター、旧短大、国際日本学部、理工学部、文科省の研究助成を受託した関係者・研究組織等の主催によるものが実現しました。展示活動の前提ともなる、資料の調査・整理や研究活動なども研究調査員制度の発足など専門の教員と合同で推進する体制が整備されました。そうした展覧会企

友の会会員の活躍（常設展の解説ボランティア）

画をはじめとする各種活動には卒業生の参画も得るなど、オール明治体制の構築が図られましたが、今後も引き続き成果を拡張したいと考えています。また、在学生教育の面では学芸員の資格課程の実習室を博物館のフロアに設置して連携を図りました。開館の頃は、どちらかと言うとリバティアカデミー講座との提携をはじめ一般社会人を対象とする生涯教育が前面に出ていましたが、資格課程の館務実習のみならず、学部間共通総合講座を開講するなど、単に展示室を開放するばかりではなく在学生との接点も講義やボランティア活動など様々な展開を見せ始めています。

さまざまな連携、連携、連携…

以前から収蔵資料に関わり外部団体との交流はいろいろありましたが、大型の博物館事業としての展開が見られるようになりました。2009年には愛知・山口の県立美術館及び学習院大学との連携により「東アジア・海のシルクロードと“福建”」展を開催。2010年度からは名古屋の南山大学人類学博物館との交流事業も始まり、その一環として2013年の早春には名古屋市博物館において特別展が開催されました。多数の館蔵資料を持ちだしての最初の出張展覧会となり、1万人を超える入場者を得ました。同年の夏には韓国公州市の石壮里博物館へ重文岩宿遺跡出土遺物が出展されています。

連携と言って忘れてはならないのは、博物館友の会との連携です。3館時代には、一般市民によって組織された友の会や学習サークルが各館において活動していました。新博物館の設立と同時に合流し、新たな友の会に生まれ変わり、現在では会員数も450名を超えるなど、すぐれた生涯学習の推進団体として活発に活動していますが、特別展の運営や図書室管理、展示解説などのボランティア活動をいただくなど博物館にとってかけがえのないパートナーとなっています。

次の10年に向けて

この10年の間、新たな研究成果が着々と蓄積されています。学界の動向も刻々と変化しています。また、グローバル化の進展も著しく、国と国の境を越えた交流もますます盛んです。当館の展示内容にそれを反映する必要が出てきました。そこで、

名古屋での出張展示（2013年）

現在、常設展示の部分的な見直しを検討しています。また、この間にパソコンやスマートフォン等携帯端末の利用などICT環境も飛躍的な進歩を遂げています。次世代の博物館を考える上でこの時代の変化を無視することはできません。現在、逐次デジタルコンテンツの作成に着手しており、いつでもどこでも博物館にアクセスできるウェブサイト上におけるバーチャルミュージアムや展示室内におけるICT環境の活用など、様々な施策を検討中です。

新博物館開館
10周年特別企画

明大博物館クロニクル ―過去・現在・そして、未来―
5月3日（土）～6月22日（日）開催
コレクションの形成過程を検証し、その先の将来を展望します。

前場幸治瓦コレクション

特別展「天平の華　東大寺と国分寺」を開催

忽那 敬三（考古部門学芸員）

2013年10月19日～12月12日の55日間にわたり、前場幸治瓦コレクションの整理成果報告を兼ねた明治大学博物館特別展「天平の華　東大寺と国分寺」を特別展示室において開催しました。3年にわたる調査の結果、総数が1万点に及ぶことが明らかになった当館所蔵の前場コレクションのうち、特にバリエーションが豊かな天平期の資料に焦点をあて、東大寺創建期の軒丸瓦やその原点ともなった甲賀寺の瓦、また聖武天皇が国家の安寧を願い全国に建立した国分寺・国分尼寺の瓦など代表的な資料50点を出展しました。

なかでも、中央から地方へ瓦のデザインが伝わったことを如実に示す信濃国分寺や上総国分寺の瓦をはじめ、武蔵国の各郡から武蔵国分寺・国府に瓦を供給したことを示す「埼」「父」「榛」など各郡名が記された文字瓦や、優品がそろう常陸国分寺の瓦が特に注目を集めました。会期中の来場者は5,144名、栄原永遠男氏（東大寺史研究所長）による開幕記念講演会は120名、吉村武彦氏（明治大学古代学研究所長）、吉川真司氏（京都大学）、向井佑介氏（京都府立大学）、清水昭博氏（帝塚山大学）、山路直充氏（市立市川考古博物館・当館研究調査員）による記念シンポジウムは202名の受講者を数え、広くコレクションの存在を周知することができたといえます。

前場コレクション以外には、東大寺をはじめとする国内諸機関から約100点に及ぶ貴重な資料が出展されました。大仏鋳造にかかわるとみられる鋳型や銅滓（東大寺所蔵）をはじめ、青銅製品を製作した場所である「鋳所」の文字がある但馬国分寺の木簡や、そこで作られた可能性がある風鐸（但馬国府・国分寺館蔵）、国分寺の造営年代論争の根拠の一つとなっている「天平勝宝二年」の年号がある安芸国分寺の木簡（東広島市教育委員会蔵）など、東日本では初めて公開される資料群が注目を集めました。なかでも、瓦の生産者の名前が記されており生産体制を知るうえで重要とされている武蔵国分寺の「秩父郡瓦長解」、「荒墓郷戸主宇遅マ結女」の二つの文字瓦（島根県立古代出雲歴史博物館蔵）も、実物が東京で公開される機会が少ない資料です。

栄原永遠男氏による開幕記念講演会

展示の様子

さらに、関東の各国分寺・国分尼寺出土資料についても、中央からの制作技術の伝播と生産体制の変化を物語る下野国分寺の瓦（栃木県教育委員会蔵）や、国分寺・国分尼寺の実態を解明するうえで欠かせない各施設名を記した墨書土器（上総国分尼寺・下総国分寺・安芸国分寺、市原市埋蔵文化財センター・市立市川考古博物館・東広島市教育委員会蔵）など、現在の国分寺研究の最前線を知るうえで欠かせない資料が一堂に会しました。

圧巻は、会場中央に設置された高さ3.6ｍに及ぶ1/30スケールの上総国分寺七重塔復元模型です（市原市教育委員会蔵）。今回は特別に相輪部分を取り外し、相輪部分に使用されたと推測される但馬国分寺の風鐸と並べ、間近で観察できるよう展示しました。また、会場では中村博子氏製作の上総国分寺復元ＣＧも上映され、七重塔模型とあわせ、往時のまさに「天平の華」にふさわしい壮麗な姿を来場者に印象付けました。

3年間に及ぶ整理作業は、特別展の開催とコレクション目録の刊行でひとまず終了しますが、今後も常設展示内でのコレクション展として定期的に前場幸治瓦コレクションを紹介し、研究と活用をはかっていく予定です。

公開特別講義　伝統的工芸品の経営とマーケティング　Vol.8

備前焼の歴史・産地形成と最新動向 を開催しました

―伝統陶器産地における市場動向と商品開発の変容―

講師　木村 宏造 氏（協同組合岡山県備前焼陶友会理事長）

去る2013年12月4日、大学院商学研究科・商学部と連携し商学研究科「商品学特論B」、商学部「商業経営論B」「市場調査論B」「商品学B」の拡大版として、他専攻科・学部の院生・学生や一般の方々に門戸を開いた特別講義を開催しました。

備前焼は釉薬を用いないざっくりとした土味を生かした焼締陶器です。製陶に携わる作家数は４００名とも言われ、年生産額も上位に位置します。製品のほとんどが手成形・薪窯焼成によって製造されており、美術的な付加価値の高い商品を市場に送り出してきました。桃山期に茶陶として全国に知られるようになり、江戸期には細工物なども作られますが、近代に入って旧藩の振興策から外れて近隣に雑器を供給する規模の産地となります。昭和戦前に至って、後に人間国宝となる金重陶陽らによる桃山陶の復元を機に人気が高まり、高度成長の進展とともに大きく躍進し、合わせて5人の人間国宝を輩出するなど「備前」のブランドが確立します。一方、成長が急であったことから流通機構が発達しなかった点、東京圏と関西圏での市場対応の違い、工業デザイナーと連携した企画商品の国際家具見本市への出展といった近年の販売促進策など、印象に残るお話を伺うことができました。

※この講義の抄録は『明治大学博物館研究報告』19号（2014年３月31日刊行予定）に収録されます。

茨城県玉里舟塚古墳の再整理プロジェクト

出土埴輪の３次元デジタル計測 を行いました

2010年の特別展「王の埴輪－玉里舟塚古墳の埴輪群」の開催によって注目を集めた茨城県小美玉市の玉里舟塚古墳の埴輪について、2012年から茨城県・明治大学考古学専攻（佐々木憲一文学部教授）・明治大学博物館の３者が協力して報告書刊行を目的とした図化作業を実施しています。通常は定規などを使って計測し、図面に描き起こしていきますが、玉里舟塚古墳の埴輪は数が多いことに加え、120㎝を超える大型品であることから、作業の効率化と計測データの活用を目的として、３次元デジタル計測を実施しています。

作業は株式会社ニコンインステックの協力のもと、ニコンメトロロジー社製多関節アーム式３次元測定機を使用しています。アームの先端部分からレーザーを埴輪に照射することで座標点群化し、図像を構成します。最大の利点は計測数値の誤差が少ないことで、こうした大型の埴輪の場合は、従来の手計測だと定規の歪みや定規から埴輪の計測ポイントまでの距離の遠さなどで誤差が生じる危険がありましたが、この方法であれば0.5mmの精度で計測が可能です。また、レーザーを照射する方法なので、写真計測のようにレンズによる歪みが生じる心配もありません。精度が高いため、ハケメやナデなど埴輪製作者の加工痕もとらえることができます。

こうして採取したデータに必要な情報を加筆して清書することで図が完成しますが、計測によって得られたデータは、図化のみならず３次元プリンタを使ったレプリカの制作や、ハケメの比較による製作体制の推定、通常では図化が困難な人物埴輪の部位の検討をはじめとして様々に活用できることから、新たな研究の視点と利用の可能性を秘めていると言えるでしょう。

オーソドックスな古文書展示

学芸員養成課程の初演展示

吉田 優（明治大学文学部准教授）

上から、解説パネルの作成、二人一組での古文書展示、一紙文書の展示、特別展入り口のタイトルパネル

1. 養成課程の学生による展示

学芸員養成課程は、2013 年 5 月 25 日（土）から 6 月 30 日（日）まで、明治大学博物館特別展示室にて、「オーソドックスな古文書展示」を開催しました。

今回の展示は、学芸員養成課程と明治大学博物館の初めての共同展示でもありました。

入り口に「ごあいさつ」として以下のように記しました。

「明治大学には、江戸時代を中心とする古文書が約 19 万点あります。江戸時代の古文書の中には、村・町・漁村文書があり、江戸時代の庶民の暮らしを知る史料です。また、私たちの曾祖父母や祖父母、親から私たちへとつづく歴史を教えてくれる史料です。

日本全国どの地域に行っても古文書は残されています。これまで古文書の展示は、博物館の展示には合わないと言われてきました。その結果、われわれの眼から遠ざけられて利用されることの少ない史料となっていました。しかし、名も知れない庶民生活の研究は、いろいろな歴史についてわれわれの理解を深めさせることになります。

歴史学者の故木村礎明治大学名誉教授は、『専攻の如何を問わず一回でも機会をつくって庶民史料にじかにぶつかっていっていただきたい』と述べていました。この展覧会では、研究の視点で扱われてきた古文書をオーソドックスなかたちで展示しました。主題は『古文書を眼で見て楽しめる視点がないか』と古文書とは専門を異にする学生たちと考えました。」

2. 古文書と遭遇した学生

明治大学の学芸員養成課程は全学部から履修者の集まることもあり、文学部はもとより農学部の学生まで、その専門とするところはまちまちです。このような学生に古文書に親しんでもらうというのが、今回の趣旨でした。

参加者は、馬場智子（文学部文学科ドイツ文学専攻 4 年）、中川莉沙（文学部史学地理学科考古学専攻 4 年）、中峰結（同）、坂本晴香（情報コミュニケーション学部 4 年）、嶋田泰明（文学部史学地理学科日本史学専攻 3 年）でした。

学生は、展示ケースのガラス越しに、古文書を見たことはあっても、今から 3 世紀前の古文書等を手に触れる、ということは初めてで、そのことにまず素朴な感動を覚えたようでした。古文書に実際に触れてみての第一声は次の通りです。

（中川）「宗門人別帳に書いてある、女子の名前は平仮名、男性は漢字。また、女性の名前には、かわいい名前がある。らん・かよ・こん・かる・つな・おき・とめ・よし・さん・ちん・つき・つよ・つる・いき・かん・とめ・くせ・よせ・らく・ろく」「文書は書いてから綴じるのか、綴じてから書くのか。」

（坂本）「この文書のくずし字は、きれいなのであろうか。」

（馬場）「宗門人別帳には、下男も下女も書いてある。御仕置五人組帳は読みや

すく展示に叶っていると思われる。」

（中峰）「五人組帳の捺印の下に、いろいろな符牒がある。また名子・水呑・座頭などの記載がある。」

（嶋田）「中世史専攻だが近世文書も馴れてくるとくずし字も大部読めるようになる。」

3. オーソドックスな古文書展示の意味

展示のタイトルを「オーソドックスな古文書展示」としたのは、江戸時代の村のどこにでもある基本文書を展示するという意図からです。基本文書とは、土地台帳としての検地帳、村の法令としての五人組帳前書、村の人口を表した宗門人別帳、税金の請求書としての年貢割付状、税金の受取としての年貢皆済目録、その他の水利土木経費の普請入用帳や普請仕様帳、村のいろいろな小事件がらみの訴状や詫び状や済口証文などを指します。これらは地域の博物館で学芸員となった場合、最初に出会う文書でもあります。

4. アンケートで好評だった学生の古文書の解説パネルの紹介

（坂本）「山は緑で海や川は青というのは、現代の色彩感覚と同じです。田が黄色で色分けされているのは、実った稲の様子を反映しているのでしょうか」「おなじ組の中でも、対人トラブルにより仲違いしてしまうことがあったようです。しかし、人間関係がこじれてしまったとしても、メンバーを代えてほしい、といった要望は聞き入れてもらえませんでした。」

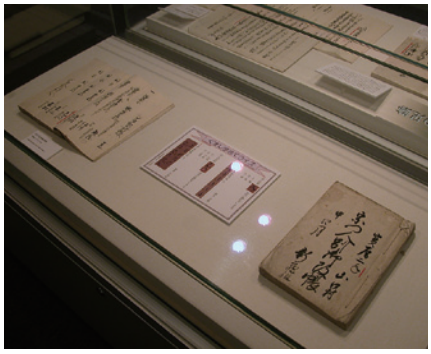
（馬場）「＜暮らし＞この文書には、村の特産品としての上田縞、川和縞などの織物や漆、農業の合間に稼ぐ農間稼ぎとして、炭や薪などが記されている。当時の人びとの暮らしが感じられ、村ごとの特徴を知ることができてとても面白い！

正面は村絵図の斜傾板展示

＜職業＞村で暮らしているのは農民だけではない。この資料では、大工・医師・鍛冶屋・桶屋などが確認できる。村によっては石工・醤油造なども見られる。村の暮らしを、様々な職業の人が支えていたことがわかる。」

（中川）「古文書に押された印は、老若男女それぞれ個別のもので、私はこういう一般の人々が個人の印鑑を持っているとは思っていなかったので、とても驚いた。印には様々なものがあり、現代のような名前が入っているものは少なく、記号化されていて何が書かれているかわからないものが多かったが、どの印も個性的でお洒落だったので面白いと感じた。」

（中峰）「教科書などを読むと、江戸時代の年貢の徴税率は「四公六民」＜40%を納める＞あるいは「五公五民」であったと言われる。しかし、被災した田や、畑にしてしまった場所の分、年貢を差し引いており、実際の税率はもう少し低いことが読み取れる。米以外の作物にかかる税や雑税についての記載は、村の産業や人々の暮らしを知るうえで興味深い。例えばこの文書には「犬代」とあり、当時は犬を飼うにも税金が必要だったのだとわかる。」



書冊文書の展示

（嶋田）「江戸時代というと、結婚して家庭を持っている男が多い、子沢山な家庭が多い、という時代劇のイメージが強いかも知れない。しかし宗門人別帳を紐解いてみると、父親と母親と子供1人のいわゆる核家族や独身の男女も少なくないことがわかる。祖母と2人暮らしの男性、女性ばかりで労働力が足りず養子を取った水呑百姓、甥や姪と住んでいるという人の記録もあり、当時の家族構成も様々なパターンが存在したことがわかる。」

学生による解説パネルは、アンケート調査（上掲）の中では、いずれも評価が高いものでした。この学生の解説パネルによって江戸時代の古文書が身近になり親しみを持つことができたという感想もありました。

5. おわりにかえて

今回の「オーソドックスな古文書展示」には、情報コミュニケーション学部・文学部のドイツ文学、考古学、日本中世史の学生が参加し、3世紀前の古文書を実際に手にすることからはじめました。生まれて初めての経験ですから、まずそこで感動していました。これで目的は達成されたと言ってもよいくらいです。学生諸君がガラス越しに見ていた古文書を自分の手で触れることで、わが国の歴史に実感として近づいたのです。

江戸時代には6万ヶ村の行政単位がありました。ですから、日本全国のどの地域に行っても古文書が残っています。このように現存する文書資料は世界に類例のない日本民族独自の資料です。資料を丹念に読めば日本民族の“斉一性”を探究する端緒になるばかりでなく、われわれの先祖たちの“民衆としての知恵”をも再発見できます。当方のねらった意図はここにありました。

今回の特別展では終始、明治大学博物館学芸員の外山徹氏、嘱託職員の海塚有理氏、明治大学大学院文学研究科博士後期課程の築地貴文氏に多くのご協力をいただきました。たいへんありがとうございました。

「SFと未来像」展

森川 嘉一郎（国際日本学部准教授）

日本は戦後、海外のSFの潮流を吸収し、さまざまな社会変化を背景にしながら、独特の空想科学的な作品群を、小説・マンガ・アニメ・特撮などの分野で産出してきました。1963年に発足した日本SF作家クラブは、日本のSF作家、翻訳家、評論家、編集者による親睦団体として、そのような吸収と産出を促進してきました。その50周年を記念する催しの一環として、明治大学博物館の特別展示室にて、本学の米沢嘉博記念図書館との共催により、昨年、「SFと未来像」展が開催されました（会期：9月1日～29日）。日本SF作家クラブと本学の、双方の担当者が協同して構成したこの展示の、本学側の担当の一人として、ご報告いたします。

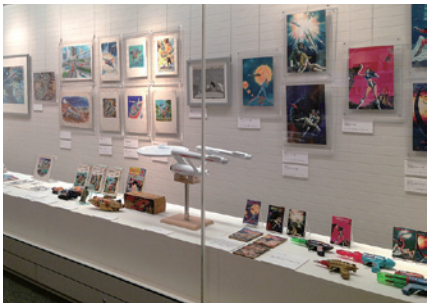
展示では、これまで日本のSFで描かれてきた未来像を大きく3つに分類し、これを3つの展示セクションに構成しました。

展示タイトルパネル

展示内観

セクション1
進歩史観的／衛生的な未来像

最初のセクションは、1970年に開催された大阪万博に代表される未来像です。1957年にソ連が世界初の人工衛星を打ち上げたことにより、米ソは宇宙開発競争を繰り広げ、わずか12年後の1969年に人類を月に到達させました。そのような、国家主導の急速な科学技術の発展が直線的に続き、人々の生活にも波及するという、明るく豊かなバラ色の未来像が、幅広く共有されていました。すぐにでも超音速旅客機が国際線の時間を劇的に縮め、大規模都市計画が広々と区画された都市部に幾何学的なシルエットの超高層ビル群を出現させ、宇宙旅行さえ身近になると思い描かれていました。SFでは、巨大なマザーコンピュータが人類を管理するような社会が描かれたりもしました。そのような未来像を、小松崎茂や伊藤展安、斉藤和明のイラストレーションや、当時の未来像を反映させた玩具や文具、児童向けに刊行されていたSF書籍、SFドラマに登場した宇宙船の模型などによって展示しました。



セクション1：進歩史観的／衛生的な未来像

セクション2
ポスト進歩史観的／退廃的な未来像

大阪万博で描かれたような未来像は、まさに万博でピークを迎えた後、急速に色褪せてしまいました。ベトナム戦争の泥沼化により宇宙開発はストップし、人類は月へ行かなくなり、オイルショックがこれに追い打ちをかけました。進歩史観や国家の威信とともに、中央集権的な技術観も失墜しました。代わってヒッピーたちのガレージカンパニーがパーソナル・コンピュータを萌芽させ、マザーコンピュータが支配するような未来像も失効しました。そのような技術観の変化を受け、SF小説だけでなく、ハリウッド映画やマンガ・アニメなどでも、国家をおびやかすハッカー、無頼なエンジニア、サイバネティックス、コマーシャリスティックな多国籍企業、文明を自壊させるカタストロフなどによって特徴付けられる、退廃的な未来像が描かれるようになりました。

セクション2：ポスト進歩史観的／退廃的な未来像

衛生的な計画都市よりも、迷宮のような路地に電飾看板が無秩序にひしめき、酸性雨が降りしきるアジア的な街並みが、未来の都市風景として前景化しました。展示では主に、そのような映画やアニメの背景美術や、登場するメカニックスの模型、広告物などをフィーチャーしました。

セクション3
ポストヒューマン

セクション1と2が比較的一般になじみ深く、世代によっては懐かしさを感じさせる未来像を振り返ることに重心があったのに対し、このセクションでは、現在のSF作家や作品が、現在進行形で描きつつある未来像を集めました。未来像というと、まずは未来の都市空間が想起される傾向があり、先の2つ

セクション3：ポストヒューマン

のセクションでもそのような描かれ方が主体となっていましたが、現在描かれている未来像を特徴付けているのはむしろ、都市よりも人間の変容であり、外宇宙よりも内的世界への拡張です。「ポストヒューマン」という言葉は、そのような変容や拡張の結果、人間を超える神のごとき存在が生成されるという予感を表しています。21世紀に入ってからの日本のSFを概観すると、クローン人間や亜人間などの形で、極めて理想化された美少女が数多く描かれています。加えてフィクションの中にとどまらず、「初音ミク」のようなヴァーチュアル・アイドルが誕生し、その人工の歌声が日常に浸透するようになりました。展示はそのような未来像を反映して、さまざまな「ポストヒューマン」の姿を表した人形やイラストレーション、映像などで構成しました。

各々のセクションではこれに加え、それぞれの未来像を表した代表的なSF小説を十数点ずつ、解説付きで陳列した読書案内を設けました。また、会場中央にはSFに造詣の深かった米沢嘉博氏の旧蔵書である約千冊のSF書の山を築き、日本のSFの厚みを眺められるようにしました。会期中はSFファンの方々はもとより、昔の白銀に輝く未来像や逆にダークな未来像を懐かしむ方々、そして「初音ミク」に親しむ今の大学生の世代まで、幅広い世代の方々が来場し、それぞれの視点で関心やノスタルジー、そして驚きをもって展示を鑑賞されていたことが印象に残りました。過去や現在の未来像の変遷を見て頂くことにより、お越しいただいた方がそれぞれに未来へのヴィジョンを描く一助になっていればと願いつつ、好評のうちに会期を終えました。

約千冊のSF書の山

学芸研究室から

先史時代ハンターの遊動生活

島田 和高（考古部門学芸員）

はじめに

本誌57・58号において後期旧石器時代の初頭（後期旧石器時代前半期前葉：eEUP）の環状のムラについて解説した。本稿では、中部・関東平野のeEUP石器群における黒曜石利用を解析し、先史時代ハンターの遊動生活について考察する。eEUPは、静岡県愛鷹山麓の諸遺跡で測定された放射性炭素年代測定値から約38,000～35,000年前の期間に相当する。石器群には台形様石器、局部磨製石斧という標式的なタイプツールが認められ（当館図録『氷河時代のヒト・環境・文化』参照）、広く日本列島に分布することが知られている。黒曜石利用に関するいくつかの証拠からeEUPハンターの遊動生活の広がりを検討し、その歴史的意義について述べる。

1. 居住地と石材原産地

eEUPハンターの主な居住地は、遺跡分布のまとまりから関東北部、関東東部、関東西部、愛鷹、野尻湖に区分することができる（以下、図を参照）。遺跡分布は100km以上の流域をもつ大形河川水系に挟まれるように分布し、居住地は大形河川によって区分されているともいえる。関東平野、愛鷹地域から最も遠方にある石材原産地は黒曜石原産地であり、高原山、中部高地、箱根、伊豆、太平洋沖の神津恩馳島となる。非黒曜石石材の原産地は、より関東平野など居住地に近く分布する。居住地を区切る大形河川は、その一方で、ある居住地から直近の非黒曜石原産地へ、さらに黒曜石原産地へと連続的にアクセスできる経路としても機能している。

2. 遺跡分布と黒曜石利用の変化

eEUPには、関東西部の立川ロームX層から出土する石器群とその上層のIX層から出土する石器群があり、時間的な前後関係がある。前者をX層段階、後者をIX層段階と呼ぶ。先史時代ハンターが日本列島にはじめて継続的に住み着いた時代である。

2-1 遺跡分布と環状ブロック群

X層段階の石器群は、関東北部（の特に西側）と野尻湖地域で希薄であり、これらの地域は当時居住地としては利用されていなかった。IX層段階になると関東北部と野尻湖地域にも多くの遺跡が残されるようになる。この時期に環状ブロック群（環状のムラ：本誌57、58号参照）が成立し、各地で発達する。環状ブロック群は、野尻湖地域から関東北部そして東部にかけてベルト状に濃密に分布する傾向がある。野尻湖地域には、多量の石器作りが行われ集中的に何らかの生業活動が行われたと解釈されるグレード3の環状ブロック群が他の地域よりも突出して分布している。

2-2 黒曜石利用

黒曜石利用の観点からX層段階の遺跡を観察すると、黒曜石製石器をもたない遺跡が大多数を占め、黒曜石が出土する遺跡でも点数で1～20点程度で、他の石材との比率では10%以下である遺跡が主体となる。IX層段階の石器群では、黒曜石を保有する遺跡そのものが増加する。黒曜石製石器が0点である遺跡は目立って減少し、まず1～20点の遺跡数が増加する。そして、100点以上、200点以上、1000 点以上の黒曜石製石器が出土する遺跡が安定して存在する。後者の遺跡は、特に野尻湖地域に多い。また、これらの中間に位置する20～80点程度の黒曜石を保有する遺跡も関東平野を中心に現れる。なお、石器群に占める黒曜石製石器の割合は、IX層石器群では0% ～100%の間で多様なあり方が残されており、遺跡での黒曜石消費の状況が様々であったことを示している。

3. 原産地別にみた黒曜石の分布パターン

蛍光X線分析による黒曜石製石器の産地推定データをもとに各居住地における産地別の黒曜石製石器の割合を出し地図上にプロットすると（図）、原産地と居住地の間に展開する黒曜石製石器の3つの分布パターンが復元できる。第1のパターンは、原産地と居住地の距離に応じた地域的偏在。高原山産（関東北部へ）、箱根・伊豆産（関東西部、愛鷹へ）、神津島産黒曜石（愛鷹、関東東部へ）は、それぞれにもっとも近い居住地に主体的に分布している。第2のパターンは、中部高地産黒曜石の汎地域的分布。愛鷹を除く各居住地では、中部高地との距離に関わりなく中部高地産黒曜石の割合が最大である。野尻

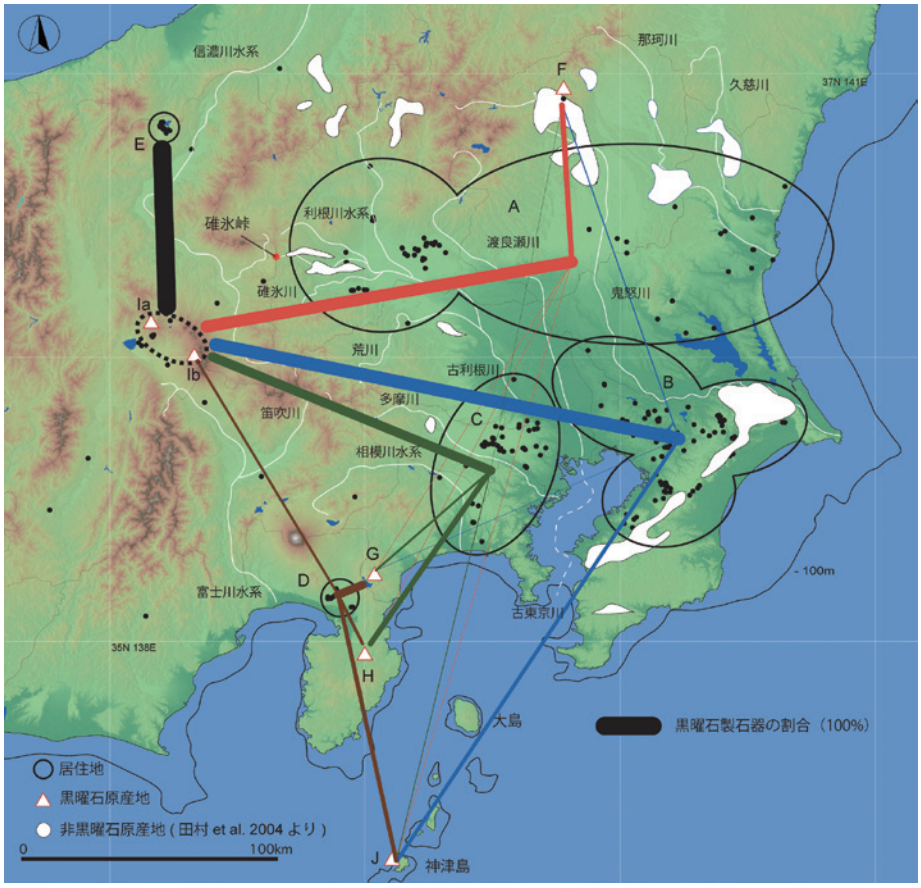


図　中部日本におけるeEUP石器群、石材原産地、大形河川水系そして原産地別黒曜石製石器の分布。●：eEUP石器群、A：関東北部、B：関東東部、C：関東西部、D：愛鷹山麓、E：野尻湖遺跡群、F：高原山、G：箱根、H：天城、Ia（霧ヶ峰）およびIb（北八ヶ岳）：中部高地、J：神津恩馳。（遺跡分布は、日本旧石器学会編（2010）「日本列島の旧石器時代遺跡」より作成）

湖地域では中部高地産黒曜石が排他的に（つまり100%）用いられている。第3のパターンは、補足的に用いられる黒曜石供給の複雑な網の目。各居住地には、必ず少ない割合ながら相対的に遠方の原産地に由来する黒曜石製石器が分布する。例えば関東北部には、箱根・伊豆、神津島産黒曜石が少量持ち込まれている。

X層段階石器群における産地推定分析事例は現状では少なく、X層段階での分布パターンは不詳であるが、約38,000年前の^{14}C較正年代が得られている愛鷹地域の井出丸山遺跡では、神津恩馳島産と中部高地産の黒曜石製石器が共伴している。関東東部では、高原山産と神津島産の黒曜石製石器が共伴する例もある。また、箱根・伊豆産黒曜石製石器もX層段階石器群から見つかっている。

4. シナリオ

X層段階で神津恩馳島を含む全ての黒曜石原産地が発見された主たる要因は、日本列島の外から新天地に到達した現代人（ホモ・サピエンス）が生存のために徹底的な資源探索を行った結果であり、いわば副次的な発見であったと推測される。神津恩馳島原産地へのアプローチは、伊豆諸島沿いに太平洋を南下する必要があり、おそらく海産資源の探索に伴って発見されたと推測される。最初のハンター達の集団は日本列島に到達する以前から海洋移動と海産資源の獲得に関する技術を保有していたことが示唆される。最初のハンター達の石器製作は、主に非黒曜石石材に依存し、居住地での黒曜石消費は低調である。それにもかかわらず、僅かでも全ての原産地の黒曜石が消費されていた事実は、居住地－非黒曜石原産地－黒曜石原産地の間に大形水系をたどり、別の水系に乗り継ぐミチが跡づけられたことを意味し、黒曜石が試験的にではあるが石器製作に組み込まれたことを示す。野尻湖地域、関東北部は、遺跡分布が希薄な地帯でまだ積極的な土地利用は行われていなかった。

続くIX層段階では、黒曜石製石器の分布パターンが明瞭になるとともに野尻湖地域、関東北部に多くの遺跡が残される。特に野尻湖地域は、その他の居住地に比べ遺跡の規模が格段に大きく、環状ブロック群も多く、その全てがグレード3である。したがって野尻湖地域は、日常的な居住地としてではなく、何らかの生業地として新たに拓かれたと考えられる。

黒曜石製石器の分布パターンから当時のマクロな遊動戦略を考察する。第1の分布パターンは、おそらく地域的に展開した生業活動と関連し、最も近い黒曜石原産地への往還に非黒曜石石材の獲得を組み込んだ遊動生活が行われていたことを示す。第2のパターンの形成は、前者より広範囲におよぶ遊動が行われ、その経路上のハブとして中部高地が利用されたことによると考えられる。野尻湖地域が見せる排他的な中部高地産黒曜石の利用、IX層段階における新規開拓そして生業活動に偏向した土地利用を考慮すると、各居住地の集団は、中部高地を経由（黒曜石を獲得）して、何らかの理由で野尻湖周辺に集合する長距離遊動戦略を実践していたと考えられる。「何らかの理由」には、ナウマンゾウなど絶滅大形草食獣の狩猟を候補に挙げられる。第3のパターンは、集団が黒曜石原産地を経由せず、別の居住地に直接移動した過程で消費された黒曜石を反映している。

最初の移住者でもあるX層段階のハンターは、資源環境の分布と経路を探索した。IX層段階に至ると環状のムラを基盤とした地域的な生業／石材獲得に加え、居住地間または太平洋沿岸から日本海沿岸に及ぶ長距離遊動戦略の実践を可能とする知識・技術を蓄積し、集団編成を構築した。このプロセスを一般的に言い換えると、世界の各地で新天地に到達したホモ・サピエンス集団による未知の景観への適応過程の一例であると評価できる。

江戸時代の津波警報

―災害史料としての内藤家文書―

増田 豪（延岡市内藤記念館　主任学芸員）

延岡藩内藤家の所領のあった宮崎県や大分県は、南海トラフ沿いを震源とする地震に伴う津波によって、広範囲に及ぶ、大規模な被害が想定されている地域になります。しかし、こうした地震や津波による被害は、何も将来に限った話ではなく、過去においても、たびたび発生していたことがわかっています。

内藤家が入封する以前の宝永４年（1707）10月４日に発生した、いわゆる宝永地震では、未時前（ひつじどき）（13～14時頃）に発生した地震により、延岡城をはじめ、多くの建物に被害が生じています。また、未時後に押し寄せてきた津波は、海岸からの直線距離で10kmを超える、海を望むこともできない内陸部の集落まで、河川の流路に沿って遡上したことが、御用日記となる「日録」（岡山大学付属図書館所蔵　三浦家文書A-6）などから確認することができます。史料上に記されているだけで、６名の死者を出したこの津波に対し、当時の住民達は大いに驚き、そして再び津波が押し寄せてくるのではないかという恐怖から、翌日になっても落ち着くことができず、藩は急遽、延岡城の最上部に設けられていた太鼓番所に法螺貝を置き、もし津波が押し寄せてきた場合は法螺貝を吹くので、その音が聞こえるまでは自宅で待機するようにとの沙汰を出しています。

このことは、津波の情報を城下の住民達へ伝える津波警報のような体制が、宝永地震以前の延岡藩には十分に整備されていなかったことを示すものと言えます。しかし、内藤家が入封した延享４年（1747）段階には、この宝永地震の経験が反映されたものかどうか史料上から判断することはできませんが、津波に対する一定の警戒感が存在していたことを内藤家文書から確認することができます。

延享４年の延岡入封に際し内藤家は、新たな所領となる延岡を統治するための様々な情報を、前藩主牧野家より引き継いでいますが、「万覚書」延享４年８月15日条（内1-6-74）からは、鐘や太鼓を用いて、火事の場所や漂着船の到来を告げる合図などと共に、津波発生時における合図を引き継いでいることを確認することができます。「牧野様ニ而出火、津波、漂着之節相図之御定」と記された内容からは、津波の襲来を確認した際には、「板木（ばんぎ）」と呼ばれる板が叩かれ、城下の住民達に避難を促すための警報が発せられる体制であったことを見ることができます。このような合図が定められていたということは、延享４年段階の延岡藩にとって津波は、領内で起こり得る災害として、十分に認識されていたことを示すものと言えます。

「日向国延岡城修理絵図」（内3-23-11日向延岡関係絵図-35-16）

「万覚書」延享４年８月15日条（内1-6-74）

こうした津波への警戒体制が、災害時に十分に機能したかどうかについては、管見の限り、史料上で確認することはできません。しかし、明和６年（1769）７月28日に発生した日向灘を震源とする地震や、安政元年（1854）11月５日に発生した安政南海地震の際にも、延岡藩領内に津波は押し寄せてきています。特に、土々呂・櫛津村において、通常より９尺程（約270cm）の水位の上昇と、16回にも及ぶ津波の襲来、そして、多くの住民達が高台へと避難した様子などを史料上から確認することのできる安政南海地震については、「日向国延岡城修理絵図」（内3-23-11日向絵図-35-16）といった絵図史料を通じて、延岡城への被害状況なども見ることができます。

こうした歴史資料における過去の被害状況などを解明することは、地域における災害意識の啓発や、防災・減災計画を考える上でも、果たすべき役割は少なくありません。そうした点においても内藤家文書は、大きな可能性を秘めた史料群であると言えます。

徳川家重の一字一石経

徳川家重墓所から出土した一字一石経

当館は2006年に元東京国立博物館学芸部考古課長・矢島恭介氏の調査研究資料（以下、矢島コレクション）の寄贈を受けました。矢島氏は早稲田大学文学部哲学科を卒業後、1925（大正14）年から帝室博物館（現・東京国立博物館）に勤務し、戦前から戦後にかけて歴史考古学の研究に力を注ぎました。矢島氏の研究のなかでも著名なのが、1958（昭和33）年8月から1960（昭和35）年1月にかけて行われた東京都港区増上寺にある徳川将軍家霊廟の発掘調査です。当時、文部省の外局であった文化財保護委員会は、戦禍を受けた徳川家墓所の改葬が決定したことに伴って墓所の発掘調査を実施し、構造と副葬品の種類、遺骨に基づく身体形質の考察など考古学、人類学など多方面の視点から調査研究を行いました。この調査からは長い間謎に包まれていた徳川将軍家の埋葬方法が明らかになり、また、当時は新聞に発掘調査の様子が掲載されるなど注目を集めました。矢島コレクションにはその発掘調査に関係のある資料が含まれています。今回ご紹介するのは、九代将軍・徳川家重の墓所から出土した一字一石経です。

一字一石経は礫石経（れきせききょう）とも呼ばれ、小石に経典を写経し土中に埋納したものをいいます。ひとつの石に一字ずつ写経していますが、素材である石の大きさによっては一面に多くの文字が書かれているものがあります。本来は末法思想に基づき、弥勒菩薩信仰による菩薩が出世する56億7千万年後の未来まで経典を保存するために行われたといわれていますが、その後、経典の保存という目的意識は薄れ、代わりに庶民が極楽往生、現世利益、追善供養を祈願するという目的から近世に流行し、埋納されるようになりました。徳川将軍家と一字一石経の関係をみてみると、三代将軍・徳川家光が日光山への埋葬の際、僧侶が「小石に法花の文字二三字づつしるし、これを築籠（きずきこめ）て三間四面のかり堂をたて」（『徳川実紀』第四篇）と、法華経を写経した小石（一字一石経）を使い仮堂を造営したとあります。これは庶民が祈願するために埋納したものとは違い、徳川将軍家は一字一石経を埋葬に用いたと推測できます。

徳川家重の石室の周辺で発見された一字一石経は12,674個に達し、増上寺徳川霊廟内で一番多く数が確認されました。大きさは縦横約2cm、厚さ約0.8～1cmの扁平な四角形に加工されています。素材は方解石（ほうかいせき）で、片面と両面に一字ずつ「大」「相」「養」「無」などと墨書されています。経典は不明ですが、増上寺が浄土宗の大本山であること、「無量」と片面ずつに写経されている資料があることから浄土宗三部経の無量寿経である可能性が高いとされています。

表裏に「無量」と写経された一字一石経（左：「無」、右：「量」）

調査研究後に改葬された徳川将軍家霊廟は通常は非公開となっていますが、年に数回一般に公開されています。家重の墓所から出土した小石は、一字一石経という人々の祈りの形と先祖を供養し敬う徳川将軍家の深い信仰心を私たちに教えてくれます。

（伊藤 友香子）

【参考文献】

◆鈴木尚・矢島恭介・山辺知行編1967『増上寺　徳川将軍墓とその遺品・遺体』東京大学出版会

◆関根大仙1968『埋納経の研究』隆文館

◆寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編2012『東叡山寛永寺徳川将軍家御裏方霊廟』吉川弘文館

◆国史大系編修会編1976『徳川実紀』第四篇（『新訂増補版　国史大系』第九篇）吉川弘文館

◆NHKプロモーション編2003『江戸開府四〇〇年記念　徳川将軍家展』

交換展「パプアニューギニアの物質文化」（常設展示室）

2010年度から始まった南山大学人類学博物館との交流事業は、第1期の3ヶ年に引き続き、本年度から第2期の3ヶ年が始まりました。

第1期では博物館資料論のシンポジウム開催と成果刊行物の発行、両館の資料収集の来歴を検証した展覧会をおこないましたが、第2期では在学生・一般を対象とする教育普及を主眼としました。お互い相手校の所有しないジャンルの収蔵資料を交換して展示をおこない（11月9日～12月14日）、相互に教員・学芸員を派遣して、在学生対象の特別講義「民族誌資料をめぐるいくつかのトピックス」（南山大学人文学部黒沢浩教授・12月6日）、「祖先の暮らしを知る―文化財としての古文書」（明治大学博物館外山徹学芸員・12月13日）及び一般向けの公開講座「南山大学人類学博物館のパプアニューギニア資料について」（同館竹尾美里学芸員・12月14日）、「江戸時代の警察制度と治安取締」（外山徹学芸員・12月7日）を実施しました。

南山大学はカトリック系の大学として多くの聖職者が教員を務めますが、彼らの収集による学術研究資料の収蔵が特徴です。アウフェンアンガー神父はパプアニューギニアへの布教経験があり、南山大では1964年に当地の学術調査をおこないますが、当時、その様子は新聞報道にも大きく取り上げられています。明治大学では、旧刑事博物館が刑罰関係資料の関連で捕者道具を収集していましたが、1990年代後半に名和弓雄コレクションを譲り受け飛躍的な充実を見ています。関係の古文書など文献資料も豊富に収蔵されていますが、全国的にも希少なコレクションであると言えます。

同「史料が語る 江戸捕物帖の世界」（南山大学人類学博物館展示室）

図書室から

「図書室から」では、博物館併設の図書室に関することをご紹介します。
今回は、図書室ボランティアの紹介と学生ボランティアの募集についてとりあげます。

明治大学博物館図書室では、図書室運営のためにボランティアの方々に活躍していただいており、明治大学博物館友の会会員による博物館図書室受付ボランティアと、明治大学学生による学生ボランティアの方々が図書室運営を支援してくださっています。

博物館図書室受付ボランティアの方には、図書室利用者の方の入退室の対応など、博物館図書室の受付をしていただいております。

学生ボランティアの方には、新着図書の配架、書架整理、雑誌などの重複調査といった図書・雑誌業務の補助をしていただいております。2013年度に活動していただいていた学生ボランティアは学部4年生が2名。週に1日2時間のボランティア活動をしていただきました。

また、学生ボランティアの中には図書館関係へ就職をされた方もいます。博物館図書室でのボランティア経験を元に、MLA(Museum・Library・Archives)連携や館種を超えた図書館界での活躍が期待されます。

博物館図書室では学生ボランティアを募集しております。

図書館員を目指し勉強をされている方、博物館図書室に興味のある方、ボランティアに興味のある方、明治大学博物館図書室で学生ボランティアとして活動してみませんか。

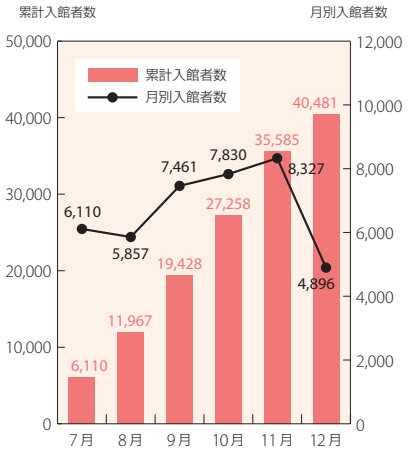
- 応募条件：明治大学の大学生、大学院生
- 活動時間：平日　月曜日～金曜日 10：00～16：30　1週間に1回、1時間以上（土曜日の活動等応相談）
- 問い合わせ先：明治大学博物館　TEL.03-3296-4448（図書担当：丸山）

博物館入館者数の動き（2013年7月～12月：延べ人数）

2004年4月以降の
総入場者数累計**630,100**人

7月～12月	延べ人数
図書室利用者	3,350
教室等利用者数	1,066

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
9/1～9/29	SFと未来像	29日間	3,272
10/19～12/12	天平の華　東大寺と国分寺	55 日間	5,144



団体見学の記録　2013年7月～12月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

【一　　般】 講談社社友会（18名）／朝日カルチャーセンター「大江戸まち探見」講座（20名）／八千代ふれあい14期会（21名）／東部地区文化財担当者会（15名）／デイサービスけやき（12名）／深谷市教育委員会　生涯学習課（10名）／板橋区立小学校事務職員会（30名）／三和シャッターOB会（23名）／奈良学友会（奈良大学通信教育部校友会）（20名）／横須賀市観光ボランティアガイドの会（10名）／毎日旅行社（22名）／太平ツアー（27名）／私大健保協議会（20名）／あすなろ会（8名）／ NPO法人　大阪府高齢者大学校　考古学研究科（22名）／関東学院中学校高等学校香柏会文化委員会（15名）／長三長寿会（25名）／シニア西口二期史跡クラブ（20名）／入間・比企地区人権教育推進協議会（26名）／練馬古文書研究会（13名）／街歩きの達人（30名）／茨城県立那珂高等学校PTA（39名）／エッセイ杉の子（10名）／関東学院中学校高等学校香柏会（70名）／NHK文化センターさいたま支社「津田令子の文学散歩」（25名）／足立歴史サークル（15名）／東京シティガイドクラブ（30名）／山梨県立考古博物館協力会（28名）／パンチョス会（7名）／読売・日本テレビ文化センター（27名）／埼玉いきがい大学蕨学園13期校友会（26名）／印刷文化懇話会神田川大曲塾（15名）／東京を歩く会（20名）

【小・中学校】 明治大学付属明治中学校（14名）／東村山第三中学校自然探究部（9名）／明治学院中学校（50名）／駿台甲府中学校（78名）／文京区立根津小学校（38名）

【高 等 学 校】 東京都立板橋有徳高等学校　1年生（21名）／サレジオ学院中高歴史部（13名）／神奈川県立住吉高等学校　2年生（90名）／昭和薬科大学附属高等学校（28名）／創英ゼミナール（29名）／千葉県立銚子高等学校　1年生（39名）／明治大学付属中野高等学校（79名）／富山県立富山南高等学校　2年生（19名）／横浜富士見丘学園中等教育学校　1年生（37名）／麹町学園女子高等学校（17名）／都立一橋高等学校（7名）／神奈川県立霧が丘高等学校　2年生（38名）／埼玉県立小川高等学校　1年生（38名）／長崎県立佐世保西高等学校（39名）

【大学・大学院・専門学校】
川口短期大学（14名）／福岡大学法学部基礎ゼミ（21名）／神戸学院大学佐藤ゼミ（25名）／神奈川大学法学ゼミナール（21名）

M2カタログ　「天平の華てぬぐい」とリニューアルボールペン２種類、好評販売中！！

去る12月、好評のうちに終了した特別展「天平の華　東大寺と国分寺」で展示されていた国分寺の文字瓦がモチーフの「天平の華てぬぐい」。鮮やかな黄色が目にも楽しい、用途問わずの便利なてぬぐいです。

お問合せを多数いただきました明博ボールペンシリーズはリニューアルして登場です。当博物館で展示されている石器・土器をモチーフにした「考古ボールペン」、大人気アイアン・メイデンをモチーフにした「刑事ボールペン」。どちらも今までにはないカラーリングです。使いやすさ満点。ぜひお手元に！！

天平の華てぬぐい　500円
ボールペン　２種　各300円

博物館友の会活動に参加しませんか

明治大学博物館友の会は、博物館のサポートとより良い生涯学習を願う人の集まりです。2014年1月現在450名余の会員を擁し各種活動を活発に行っています。

【博物館友の会活動】

友の会の主要な活動は下記の通り、参加は各自の自由です。 それぞれに興味のある活動に参加しています。

■ボランティア活動

・展示解説活動：博物館来館者へ展示物の解説をしています。
・図書室管理活動：博物館図書室の利用者への受付と利用案内をしています。
・特別展受付活動：年1～2回開かれる特別展の受付をしています。

■行事の企画・実施

友の会では会員の興味・関心を基に各種講演会、バス見学会、宿泊見学会などの行事を企画し、実施しています。 2013年度は講演会9回、見学会を6回実施致しました。（友の会会員は講演会参加料は無料、見学会は会員価格を設定しています）

■分科会活動

友の会会員が興味のある事に対して自主的に学習会を開催しているグループ活動です。 現在9つの分科会があります。 多くの分科会は月1回、博物館教室や会議室で学習会を開催しています。

【友の会の年会費】

・入会金：なし
・一般会員：3,000円
・家族会員：1,500円（一般会員と同一住所の方）
・学生会員：1,500円（現役大学生、高校生、専門学校生）

【明治大学博物館友の会　連絡先】

〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館　友の会宛
メールアドレス　meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。
連絡は必ずハガキまたはＥメールでお願いします。

友の会申込方法等　詳しくは明治大学博物館に備えています「入会のご案内」をご参照いただくか、友の会連絡先へＥメール・ハガキにて「入会のご案内」をご請求願います。

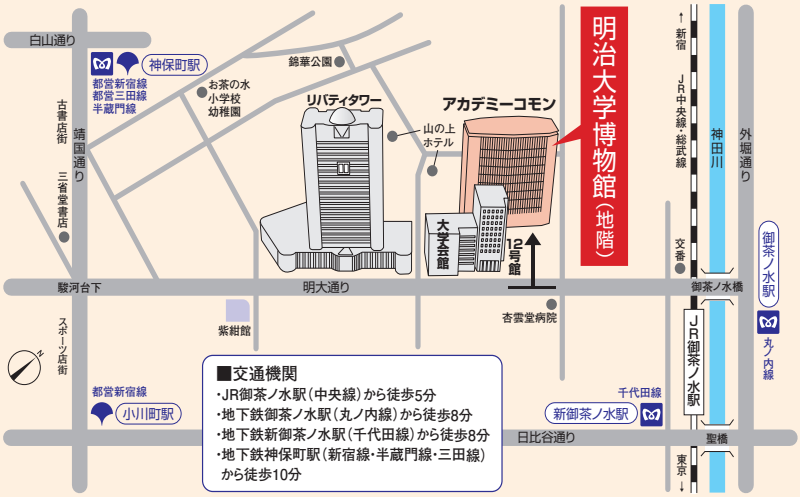
博物館案内

博物館案内

◆開館時間
10:00～17:00(入館16:30まで)
◆休館日
夏季休業日(8/10～8/16)
冬季休業日(12/26～1/7)
８月の土･日に臨時休館があります。
◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

◆開室時間
月～土　10:00～16:30
◆閉室日
日曜･祝日･大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は閲覧･コピーのみとなりますので
ご了承ください。



■交通機関
・JR御茶ノ水駅（中央線）から徒歩5分
・地下鉄御茶ノ水駅（丸ノ内線）から徒歩8分
・地下鉄新御茶ノ水駅（千代田線）から徒歩8分
・地下鉄神保町駅（新宿線･半蔵門線･三田線）から徒歩10分

編集後記

春です！木々や花々も彩り鮮やかな季節になり、明治大学博物館も10回めの春を迎えることができました。
そんな節目の今年は5月に10周年特別企画展を開催します。
過去・現在・そして、未来。変化する明治大学博物館を、どうぞお楽しみください。

MUSEUM EYES ミュージアム・アイズ 2014 Vol. 62

明治大学博物館　MUSEUM EYES（ミュージアム・アイズ）第62号
〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1　アカデミーコモン地階　【TEL】03-3296-4448　【ホームページ】http://www.meiji.ac.jp/museum/
2014年3月26日発行　（印刷）株式会社サンヨー　（第62号製作スタッフ）土谷あゆみ・松尾麗・忽那敬三・外山徹